令和5年度

門川町立小・中学校児童生徒 第四十一回読書感想文コンクール 入選作品集

門川町教育委員会

まえがき

新型コロナウイルス感染症が五類に移行して以来、生活に日常が戻りつつあります。各学校においてもコロナ禍前の教育活動が少しずつ展開されるようになり、子どもたちののびのびと学習に取り組む姿を見ると大変嬉しく思います。

これまでの先生方の感染症対策への不断の努力と、保護者や地域の皆様のご協力に改めて感謝申し上げます。

そして、今年も第四十一回「読書感想文コンクール」が実施できたことを嬉しく思います。

さて、本コンクールの応募数を見てみますと、その数は年々増加しており、今回は、昨年度の応募を大きく上回る一一七四（千百七十四）点という応募があり、これは実に町内児童生徒の約八割となっています。このことは、学校と家庭による読書活動の推進の成果であると実感しております。

本紙においては、応募作品の中から、審査によって入選した児童生徒の作品をご紹介します。紹介する作品を読んでみますと、作者が本に込めた想いや登場人物の心情を豊かに読み取り、自分の生き方について考える素晴らしい作品が多数ありました。児童生徒がテーマにした内容をいくつか紹介しますと、「日常への感謝」「家族愛」「夢」「チャレンジ精神」「自分らしさ」「食料問題」「命の尊さ」「人権」等、まさにこれからの社会を生きるために大切な生き方について考える素晴らしいテーマを取り上げた作品となっていました。

これから、季節が秋から冬へと向かいます。夕暮れ時が刻々と早まるこの時期は、読書を楽しむにはとてもよい季節と言われます。本の中では世界中を自由に駆け回ったり、たくさんの人々と出会い、色々な生き方や考え方に触れたりすることができます。この時期に、できれば家族でたくさんの本に触れてみてはいかがでしょうか。

なお、門川町には、各学校の図書担当の先生方が中心となって選んだ「門川の子どもたちに読ませたい図書百冊」（バージョンⅠ・Ⅱ、全二百冊）があります。先生方お薦めのたくさんの本もぜひ手に取って、一冊でも多くの本との出会いを楽しんでもらいたいと思います。

結びに、「読書感想文コンクール」の実施に当たり、児童生徒への指導並びに審査等のご協力をいただきました各学校の先生方、保護者の皆様、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和五年十月

門川町教育委員会　教育長　金子　文雄

読書感想文発表会のうつりかわり・・・

回数	年 月 日	名 称	参加者数	対 象 者	備 考
1	59. 1.下旬	童話発表会	16	門小児童	
2	60. 1.27	童話発表会	26	門小・五十鈴小児童	
3	61. 2. 2	童話発表会	29	門小・五十鈴小・草小児童	
4	62. 1.25	童話発表会	38	町内全小学生	
5	63. 2. 7	童話発表会	37	町内全小学生	
6	元. 2.19	童話発表会	36	町内全小学生	
7	2. 2. 4	童話発表会	37	町内全小学生	
8	3. 2. 3	童話発表会	37	町内全小学生	
9	4. 2. 9	童話発表会	36	町内全小学生	
10	5. 2.14	童話発表会	34	町内全小学生	
11	6. 2.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数199 24	町内全小・中学生 入選者	総合評価
12	6.10.30	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数222 16	町内全小・中学生 入選者	総合評価
13	7.10.29	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 18	町内全小・中学生 入選者	総合評価
14	8.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数137 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
15	9.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数151 19	町内全小・中学生 入選者	作文評価
16	10.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数152 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
17	11.10.24	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数139 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
18	12.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数124 17	町内全小・中学生 入選者	作文評価
19	13.10.28	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数117 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
20	14.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数109 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
21	15.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数141 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
22	16.10.23	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数150 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
23	17.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数135 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
24	18.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
25	19.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数119 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
26	20.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数80 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
27	21.11.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数84 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
28	22.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
29	23.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数77 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
30	24.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
31	25.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数65 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
32	26.10.18	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数59 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
33	27.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数54 9	町内全小・中学生 創刊歴行80周年記念特別賞・ 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
34	28.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
35	29.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数47 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
36	30.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数53 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
37	元.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
38	2.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数48 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
39	3.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数50 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
40	4.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数44 4	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
41	5.10.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 4	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価

もくじ

まえがき …… 1

読書感想文発表会のうつりかわり …… 2

小学校低学年の部

最優秀賞　ご先ぞさまからきみへ　草川小学校　二年　土井　柑奈　6

優秀賞　おかあさんとひまわり　草川小学校　二年　岩田　奈夕　7

優良賞　ヘレン＝ケラー　門川小学校　一年　田端　花　9

優良賞　「けんかのたね」をよんで　草川小学校　一年　請関　明莉　10

小学校中学年の部

最優秀賞　すてきなおもいで　草川小学校　三年　請関　瑚夏　11

優秀賞　「しっぱいにかんぱい」を読んで　門川小学校　三年　赤木　晴　13

優良賞　家族のきずなを考える　門川小学校　四年　黒木　恋華　14

優良賞　自分らしさを大切に　草川小学校　三年　山本　宗資　16

小学校高学年の部

最優秀賞　世界の食料危機を学ぶ　門川小学校　五年　黒木　愛峨　17
優秀賞　命の大切さをより深く知る　五十鈴小学校　六年　森永　晴　19
優良賞　言葉を伝えることの大切さ（障害というハンディを乗り越えて）　門川小学校　六年　山野内　瞬　21
優良賞　幸せってなんだろう　草川小学校　五年　田吹　莉央　23

中学校の部

最優秀賞　いのちを食べる　門川中学校　一年　安田　創　26
優秀賞　「この夏のこともどうせ忘れる」を読んで　門川中学校　三年　甲斐　七海　27
優良賞　ありのままの自分を受け入れる為に　門川中学校　一年　鮎川　真衣　29
優良賞　無知であふれる多様性　門川中学校　二年　山内　心陽　31

読書感想文コンクール佳作受賞者一覧　……　33

読書感想文コンクール審査委員一覧　……　33

あとがき　……　34

小学校の部

低学年

中学年

高学年

小学校低学年の部　最優秀賞

ご先ぞさまからきみへ

草川小学校　二年　土井（どい）　柑奈（かんな）

「いのちをつないでくれてありがとうございます。ごえんをつないでくれてありがとうございます。」

わたしは毎日学校に行って、べんきょうをしたり、あそんだり、学校から帰ったら空手に行って、れんしゅうをがんばっています。お父さんは朝からあせをながして、たくさんの人の家を作るしごとをしています。お母さんは毎日わたしのならいごとや妹のようち園のおくりむかえをしています。でも、こうやってふつうに生かつが出きるのは、あたり前のようであたり前じゃなかったんだと、この本を読んで気づきました。

むろ町じだいのへいきんじゅみょうは十六さいぐらいで、せんそうでいのちをつなげなかった人もいるそうです。わたしはせんそうやじこでいのちをおとすなんて考えられません。もっともっと生きて、友だちとたくさんあそんだり、いろいろなところへたくさん行ったりしたいと思うからです。

ご先ぞさまの数は、十だい前で千二十四人、四十だい前は二ちょう人もいるそうです。こんなに多くのご先ぞさまがいると知って、びっくりしました。

そしてこのたくさんのご先ぞさまが、一人一人大切にいのちをつないでくれたおかげで、お父さんとお母さんが生まれて、いつか出会って、わたしが生まれました。もし、ご先ぞさまのだれか一人でもいのちをつなぐことができていなかったら、今のわたしのいのちもなかったんだなと思うと、本当にかんしゃの気持ちでいっぱいです。

こうやって大切につないでもらったいのちを、こんどはわたしがつないで行くばんです。元気に楽しく毎日せいいっぱい生きて、いのちを大切にし、ご先ぞさまにもよろこんでもらえるようにがんばりたいです。

「ご先ぞさま、いつも見まもってくれてありがとうございます。」と、心の中で手をあわせて言ってみると、ご先ぞさまが近くにいる気がして、一人ぼっちじゃないんだと、なんだかあたたかい気もちになりました。

ご先ぞさま、これからもわたしたちの家ぞくのことを見まもっていてくださいね。ず――――っと。ず――――っと。

（読んだ本・「ご先ぞさまからきみへ」）

小学校低学年の部　優秀賞

おかあさんとひまわり

草川小学校　二年　岩田（いわた）　奈夕（なゆ）

わたしは、ようち園の時に先生に読んでもらった本の中で、わすれられない一さつがあります。それは「ひまわりのおか」という本です。図書かんに行った時、おりがみでつくったひまわりを見て、もう一ど読みたくなりました。

ひがし日本大しんさいで、七十七人の小学校の子どもたちと十人の先生がつなみにいのちをうばわれてしまいます。その子どもたちのおかあさんが子どものことを思い出しながら、小学校のそばにひまわりをうえてそだてるお話です。

六年生の小晴ちゃんがやっと見つかりました。まだ見つかっていない子がたくさんいるのに、ほんとうに見つかってよかったと思いました。小晴ちゃんのおかあさんが、「五か月間、よくがんばったね、小晴。海までながされていったのに、かえってきて

くれてありがとう。ほめてあげたいえらいえらい。」と言っていました。小晴ちゃんは、おかあさんに見つけてもらって、ほめてもらってうれしかったと思います。また、おかあさんが五か月間さがしつづけたところがすごいなと思いました。わたしだったら、五か月間もさがしきれないかもしれません。

おかあさんたちがうえたひまわりはさいしょ、やせっぽちだったけれど、子どもをそだてるように、お水をたくさんあげて大じにそだてたからたい風のつよい風にもまけることなくたくましくそだちました。わたしはそのひまわりをそうぞうすると、ひまわりが、なくなった子どもたちがわらっているように見えました。

ようち園で読んでもらった時は「つなみにのみこまれていそう」としか思いませんでしたが、今回読んでみると、おかあさんが子どものことをどれだけ大切におもっているのかをしり、わたしも、おかあさんにこんなふうにおもわれていると思ったら、うれしくかんじました。そして、おかあさんにこんなかなしい思いをさせないように、これからはもっとしんけんに、ひなんくんれんをがんばりたいです。「ひまわり」を見るたびにきっとまた、この本のことを思い出すと思います。

（読んだ本・「ひまわりのおか」）

小学校低学年の部　優良賞

ヘレン＝ケラー

門川小学校　一年　田端（たばた）　花（はな）

わたしが、このほんをえらんだりゆうは、ひょうしのおんなのひとのえがかわいくて、おもしろそうだったからです。

わたしのこころにのこったところは、ヘレン＝ケラーは、目がみえなくて、耳がきこえなくて、口もきけないのに、サリバンせんせいとおべんきょうをして、ゆうめいになったところです。わたしもおかあさんにいわれて、目や耳をかくしてみました。でも、えんぴつももてなくて、おべんきょうをするきもなくなりました。

きっと、ヘレン＝ケラーもつらくて、かなしいおもいをたくさんしただろうなと、くらいきもちになりました。そんなかなしいおもいをしても、がんばりつづけるヘレン＝ケラーは、すごいなとおもいました。

わたしも一ねんせいになって、おべんきょうをがんばっています。じゅぎょうちゅうに、みんなよりもじをていねいにかくのがおそくなることもあります。

それがかなしくなることもあるけれど、ヘレン＝ケラーのようにおおきくなったときのゆめをもって、がんばりたいとおもいます。

わたしのゆめは、おいしゃさんです。かどがわちょうに、こどものびょういんをつくりたいとおもっています。ヘレンが、たくさんのひとをえがおにしたように、わたしもわたしにできることをいっしょうけんめいがんばって、たくさんのひとをえがおにするおいしゃさんになりたいとおもっています。そのためには、べんきょうをがんばります。ニがっきからのおべんきょう、とくにかんじのおべんきょうをがんばっていきます。

（読んだ本・学研伝記シリーズ「ヘレン＝ケラー」）

小学校低学年の部　優良賞

「けんかのたね」をよんで

草川小学校　一年　請関（うけぜき）　明莉（あかり）

わたしには、きょうだいがふたりいます。３ねんせいのおねえちゃんと、ねんちゅうのおとうとです。わたしは、きょうだいげんかをたくさんするので、このおはなしのだいめいをみて「けんかのたね」ってなんだろうとおもってよんでみました。

このおはなしにでてくるかぞくは、おとうさん、おかあさん、４にんきょうだいのドラ、フランク、エミリー、ミーナ、それからねこのプッス、いぬのボンゾーです。あるひ、おとうさんが、くたくたになってかえってきたら、４にんのこどもたちがおおげんかをしていました。もみくちゃになって、たたきあったり、わめきあったりしていました。このかぞくのおかあさんは「いったいだれをしかったらいいのやら・・・」と、とてもこまっていました。いちばんうえのおねえちゃんのドラは、フランクがわるいといって、フランクはドラがわるいといって、ほかのきょうだいもみんなだれかのせいにしていました。さいごは、ねこのプッスがけんかのはじまりということになりました。このかぞくのおとうさんが「おおきなもめごとっていうのは、ほんのささいなことからおこるものなんだ。」といっていました。わたしのきょうだいげんかのはじまりは、おもちゃのとりあいや、はみがきのじゅんばんのとりあいです。とりあいをすると、たたきあったり、わるぐちをいいあったりします。このかぞくのおとうさんがいうように、ちいさなことからおおきなけんかになっていきます。このきょうだいとわたしのきょうだいはおなじだなとおもいました。

さいごは、ボンゾーとプッスがみんなにあやまりにいきました。すると、みんながじぶんのわるかったところをあやまって、なかなおりをして、みんなえがおになりました。わたしは、きょうだいげんかをしたら、まけたくないので、じぶんからあやまるのはいやです。でも、ゆうきをだしてあやまったボンゾーとプッスのように「けんかのたね」がなにかをかんがえて、じぶんのわるいところは「ごめんね。」といえるようになりたいです。

（読んだ本・「けんかのたね」）

小学校中学年の部　最優秀賞

すてきなおもいで

草川小学校　三年　請関（うけぜき）　瑚夏（こなつ）

わたしには、二人のおじいちゃんがいます。お父さんの方のおじいちゃんは、魚つりが大すきです。船で魚つりに行って、つってきたばかりの魚をわたしたちに持ってきてくれます。魚は、ガガラやハタなどです。お母さんの方のおじいちゃんは、野さいや花、金魚やメダカなどの生き物が大すきです。おじいちゃんの家のにわでは、ゴーヤやミニトマトがとても元気にそだっています。

この本の表紙には、おじいちゃんと女の子が手をつないでえ顔で見つめ合ってる様子がかかれています。そして、題名は「おもいではきえないよ」と書いてあったので、わたしは、女の子とおじいちゃんの大切な思い出について書かれたお話ではないかなと想ぞうし、どんな思い出が書かれているのか読んでみたくなりました。

この本には、おじいちゃんと、女の子「あたし」が出てきます。春の思い出からはじまって、にわがきれいな花やちょうでいっぱいでした。夏には、おじいちゃんと、おもちゃの車を走らせて遊んだ思い出が書かれていました。秋には、おじいちゃんから手作りのノートと、にじいろのえんぴつをもらったことが書かれてありました。冬には、おじいちゃんが子どものときにすきだった物語を聞かせてもらう場面が書かれていました。春、夏、秋、冬、ずっと楽しい思い出を作ったんだなあと思いました。でも、次のページをめくると、わたしは時が止まったよう

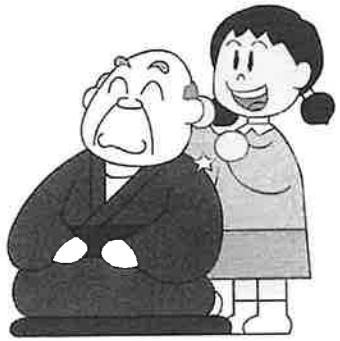
な気もちになりました。なぜかというと、「おじいちゃんの物語は、もうきけない。」と書かれていたからです。いつもおじいちゃんがすわっていたいすが空っぽになっていて「あたし」とお母さんが悲しそうな顔をしていました。この場面を読んで、わたしはすぐに何がおきたのかわかりました。おじいちゃんは、なくなってしまったのです。あんなに大すきだったおじいちゃんがなくなって「あたし」は悲しかったと思います。おじいちゃんの部屋のかたづけをしていると、なつかしいものがたくさん出てきました。きれいなおし花、おもちゃの車など、おじいちゃんと「あたし」の大切な思い出ばかりです。そのとき「あたし」は気づきました。「思い出はきっと、いつでも遊びに行ける部屋なんだ。」と。

わたしの二人のおじいちゃんは、わたしが生まれてからずっと、わたしのことをかわいがってくれました。小さいころの思い出も、たくさんあります。運動会にもおうえんに来てくれて、二人とも、

「こ夏、がんばれ。」

と声をかけてくれます。その声で、わたしはますます力がわいてきます。二人のおじいちゃんには、いつまでも元気でいてほしいです。そして、わたしもこの本の「あたし」のように、これからも春・夏・秋・冬ずっと、二人のおじいちゃんとたくさんのきえることのない思い出を作っていきたいと思います。

（読んだ本・「おもいではきえないよ」）



小学校中学年の部　優秀賞

「しっぱいにかんぱい」を読んで

門川小学校　三年　赤木（あかぎ）　晴（はる）

わたしは夏休みにピアノの発表会がありました。ドキドキしてまちがえたらどうしようと思っていたら、お母さんがこの本を読んでみたらと言ってくれました。

たつやのお姉ちゃんのかなは、足がはやくて一年生の時から運動会のクラスべつたいこうリレーのせん手にえらばれていました。六年生さい後のアンカーも一いでテープを切ったけれど、バトンパスの時にテーク・オーバー・ゾーンから一メートルほどはみだしたのでしっかくになってしまいました。かなはかちたいと思いだけであせってしまい、大事なことをわすれていて、全校生との前ではじをかいてしまいました。

わたしも、一、二年生の時、全校リレーにえらばれてうれしかったけれど、こけたり、バトンを落としたらどうしようかと心ぱいになったことを思い出します。

落ち込んでいるかなに心ぱいしたおじいちゃんから、「バランずしを作るからおいで。」と電話がありました。おじいちゃんはきっとかなのことを心ぱいしてはげまそうとしたのだと思います。

親せきのみんなも集まって、みんなで作ったおすしを食べながら、一人ずつしっぱい話をしました。しっぱい話を一人ずつするたびに、おじいちゃんがグラスを高く上げて、「しっぱいにかんぱい。」と言いました。

わたしのお母さんは、わたしが何かちょうせんしたり、心ぱいな顔をしていると、「大じょうぶ、楽しんで。」といつもそう言ってはげましてくれます。おじいちゃんもかなに元気になってほしくて、そう言ってはげましてあげたのだと思いました。

この本の中には、「しっぱいには、いのちにかかわるほどの大きなしっぱいもあるけれど、しっぱいして大きくなるんだし、ときがたつと、しっぱいがいい思い出になるんだね。」という言葉と、「しっぱ

いを大事にして、大きくなってくれよ。」という言葉が書いてあります。しっぱいをすることは、悪いことではなくて、一歩ずつせい長できることなのかなぁと思いました。

かなは、みんなのしっぱいの話を聞いて、「わたしのしっぱいも、わらって話せる日がくるのかしら・・・。」と言いました。

わたしはまだ大きなしっぱいをした事はないけれど、いつかわたしがしっぱいした時や、お友だちや家族がしっぱいした時には、「大じょうぶだよ、しっぱいにかんぱい。」と言えるようになりたいです。

今からたくさん、たくさんしっぱいをけいけんすると思うけれど、少しずつせい長していけたらいいなと思います。

（読んだ本・「しっぱいにかんぱい」）

小学校中学年の部　優良賞

家族のきずなを考える

門川小学校　四年　黒木（くろき）　恋華（れんげ）

弟か妹がほしいなと、ずっと思っていました。わたしは、一つ年上の兄がいます。お家では、

「生まれた順番だからね。」

と、母によく言われて、優先されることがあります。

「なんで、先に生まれただけで。」と、いつも不満に思っていました。

この本の主人公健太は、「弟がいたらいいな。」という願いがあり、あるお店で、自分のおこづかい全部と引きかえに弟ロボットを手にいれます。このロボットからは特しゅな電波が出ていて、会った人は最初から健太に弟がいたとして記憶が変えられてしまいます。健太が本当のことを言わないかぎり、弟がロボットだとばれることはありません。

最初は弟ができたことがうれしくてかわいがっていた健太でしたが、実際に一緒に生活してみるといい事ばかりじゃないことに気づいていきます。お母さんは一人じめできないし、大好きなおやつも食べられてしまいますが、「お兄ちゃんだから、がまんしてね。」と言われてしまいます。

わたしの場合と反対だなと思いました。この部分を読みながら、もしかしたらわたしの兄も同じように、「お兄ちゃんなんだから。」と言われ、がまんした事がたくさんあったのかもしれないと気づきました。兄、姉がいる人、弟、妹がいる人、一人っ子の人でも、きっとそれぞれがないものねだりなのだなと思いました。

けっきょく、健太は、「かりてくるんじゃなかった、こんなやついなければよかった。」

と弟ロボットをむりやりお店にかえしに行ってしまいます。一度かえしたロボットはもう二度ともどってくることはありません。しかし、健太は、弟ロボットを失ってから、その大切さに気づき後悔しました。

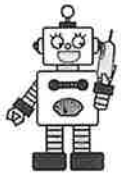
自分にとって、いやな事があっても家族がどれだけ大切か、一緒にいてくれるそんざいがどれだけ大事かを忘れてはいけません。家族、兄弟というものは、一緒に生活し、日々をつみ重ねてきずなを強くしていくものだと思います。

健太は弟ロボットをかえしてしまいましたが、後悔と悲しさと、弟ロボットの事が大好きだったという気持ちにあふれていました。きっと健太はそんな思いをむねに心の成長をしたのだろうなと思います。

「兄弟なんかいらない。」この気持ちは、兄弟がいる人であれば、だれしも一度は考える事ではないでしょうか。ないものねだりをするのではなく、今の自分の家族を大切にする事が大事なのだと気づきました。

私の兄は、よくお手伝いをしています。私の荷物が多いとき、荷物を持ってくれます。よいところがいっぱいあります。兄妹、そして、家族のみんなで仲よくしていきたいです。

（読んだ本・「レンタルロボット」）



小学校中学年の部　優良賞

自分らしさを大切に

草川小学校　三年　山本（やまもと）　宗資（そうすけ）

ぼくがこの本を読みたいと思った理由は、どうして赤おにがなくのだろうと思ったからです。赤おには、強く、つねにおこっていて、ぼうげんをはいておどかす、こわいイメージです。そんな赤おにがなくという題名を見て、おどろいたので読んでみました。

このお話は、人間となかよくなりたい赤おにが、なかなかうまくいかず、悲しんでいたところからはじまります。そこに青おにが来て、自分がぎせいになる作せんを考えました。それは、人間の前で青おにがあばれて、あばれる青おにを赤おにがやっつけるというもでした。青おにの作せんのおかげで、赤おには人間となかよくなれて話は終わります。このお話をよんで感じたことは、赤おにも青おにも自分らしいということです。その理由は、赤おには人間となかよくなりたいと思ったら、自分の思いに向けて行動したからです。かっこいいなと思いました。ぼくは、大すきなかぶと虫のよう虫をもらって、大事にそだてよう、一生けんめいおせわをしようと思っていたのに、サナギになってもうすぐかぶと虫になるところで死んでしまったことがあります。次からは、よう虫が元気なかぶと虫にせい長するように、赤おにみたいにきちんと行動して、一生けんめいおせわをしようと思いました。

青おには、自分をぎせいにして赤おにの気持ちを大切にしたところがすごいと思いました。ぼくは、きゅう食の時間におかわりしたいサラダがありました。じゃんけんをしてかった人が食べられることになったけど、その友だちもすごく食べたそうだったので、ゆずったことがあります。その友だちは、おいしいそうにサラダを食べていました。ぼくは、いいことをしてよかったなと思いました。

赤おには人間となかよくなり、すこしもさびしいことはなくなったと書いてありましたが、青おにがいなくなってしまったことに、ぼくはとてもさみしい気持ちになりました。青おにからの手紙には、赤おにのことを思う気持ちがたくさん書かれていました。そこから、自分が悪ものになっても赤おにをまもりたいという気持ちがつたわってきました。ぼくは、今までそのうような気持ちになれないことが多かったので、赤おにのやさしさと青おにの心の強さを見習って、学校も習い事も、人の気持ちを考えながら自分らしく生活していきたいです。

（読んだ本・「ないた赤おに」）

小学校高学年の部　最優秀賞

世界の食料危機を学ぶ

門川小学校　五年　黒木（くろき）　愛峨（あいが）

フードドライブを知っていますか。町中でも、このフードドライブの旗を見かけることがあります。またニュースでもフードドライブやフードバンクの活動が報道されているのを見ることがふえました。

ぼくは、フードドライブもフードバンクもどんな活動なのか、くわしく分かっていませんでした。ただ何となく、食べ物のもったいないをへらす活動なんだろうなくらいにしか思っていませんでした。

でも夏休み、図書館で貸りた「食べものが足りない！食料危機問題がわかる本」を読んだことで、フードドライブやフードバンクだけでなく、世界全体の食料危機の現実について知ることができました。

この本には、食料危機の原因は、貧困や経済格差、紛争などで、二〇二〇年からのコロナ禍により食料危機は、益々深刻化していると書かれていました。

この本の中で、ぼくが一番おどろいたことは、世界には給食を食べられない子どもが一億八千七百万人もいるということでした。きがの問題は、日本に住んでいるぼくたちは、あまり関係のないことのように思う人が多いかもしれません。ぼくもそうでした。

しかし、日本でも日々の食事に困っている家庭はたくさんあります。どのくらいの割り合いなのか気になったので、調べてみたところ、日本人口の六人に一人、約二千万人が貧困ライン以下での生活を余儀なくされていることが分かりました。きがや栄養不足は、どこか遠い国での話ではないのです。

日本の貧しい家庭の子どもの中にも、学校給食しか食べられない子がいるそうです。今、ぼくが読書感想文を書いている、この夏休み中にも、給食が食べれず困っている人がいるということなのかと考えれば、世界の食料危機問題が、自分の身近な問題なのだということがよく分かりました。

食料危機を解決するために、ぼくができることは何だろう。本を読みながら考えてみると、実行できることが意外とたくさんあると思いました。

例えば、社会の問題を自分事としてとらえる、毎日使う電気に関心を持つ、消費期限と賞味期限のちがいを理解する、などはぼくにもすぐできることです。

そして、食べ物をシェアし支え合うということが、最初に書いたフードドライブやフードバンクの取組だということも分かりました。

食べ物のシェアには、大きく分けて「寄付」と「販売」の二つの方法があります。この食料の寄付活動がフードドライブともよばれています。一九六七年にアメリカで始まった活動だそうですが、この部分を読みながら、日本でいう「おすそ分け」のことなんだろうなと思いました。食べられるのに捨てられてしまう食品を必要とする組しきや人へとシェアすること、日本人は昔から家族や親せき、ご近所の人達としてきたことです。でもかく家族がふえたことや地域との関わりがうすくなっていることで、このおすそ分けの文化が変わってきているそうです。

ぼくはこの本を読んだことで、今まで知らなかった食料危機の問題が、こんなにも自分の身近なことなんだということに気づくことができました。

読んでみよう、調べてみようと思うことから始めることが「何かを学ぶ」ということです。きっとこの食料危機問題を、たくさんの人達に知ってほしくて著者はこの本を書いたんだろうなと思います。まずはこの本から学んだことを実行し、食料危機を解決するためにぼくにできることが他にもっとないのかをこれからも考え続けていきたいです。

（読んだ本：「食べものが足りない！食料危機問題がわかる本」）

小学校高学年の部　優秀賞

命の大切さをより深く知る

五十鈴小学校　六年　森永（もりなが）　晴（はる）

二〇一一年三月十一日、東日本大震災。

これまで、社会の授業や防災の授業などで、この地震によってたくさんの人が亡くなったことや、復興に向けて、今もがんばっている人達がいることを学んできた。しかし、地震が起きたとき、動物たちはどうしていたのかについて、考えたことはなかった。

「捨て犬・未来　命のメッセージ」は、東日本大震災で被災した中学校の校長先生や生徒と、被災しなかった筆者が、震災直後から何を考え、どのように行動したのか、お互いが出会うまでの時間を交互に追って書かれた本である。ぼくは犬が好きなので、これまでも「捨て犬・未来」シリーズは読んできたがこの話は、特に命の大切さについて考えさせてくれる本だ。

千葉和彦校長先生は、避難所となった宮城県松島市矢本第一中学校で、犬を連れて避難してくる人達を受け入れた人だ。また、千葉校長先生は、ただ受け

入れただけでなく、ペットフードを自分で買ってきたり、犬の飲み水を確保したりもした。自分達が食べる物も少ししかなく水も十分ない中で、どうして犬のことまで考えることができたのだろう。ぼくが、このような状況だったら、校長先生と同じ行動はできないと思う。なぜなら、避難している人から、

「人間と犬とどっちが大事なんだ。」

と言われたときに、

「それでも犬に水を分けます。」

と言える自信がないからだ。犬が好きという気持ちはあっても、犬の命を人間と同じように考えていないのかもしれない。

「私たち人間が、命を簡単に考えるから、捨てられる命が、後を絶たないのである。」

これは、捨て犬・未来と一緒に命の授業を行っているこの本の著者、今西乃子さんの言葉だ。ぼくは、この言葉を聞いて確かにそうだと思った。人間が動物の命を簡単に考えるから、犬を捨てたり、犬を虐待したりするのだ。でも、校長先生は、命について真剣に考えているから、犬の命を守るための行動ができたのだと思う。

家族と車でひ難していると中、津波に流され、自分だけが助かった中学生の亮太さんは、「校長先生、自分に何かできることはありませんか。」

と言って、ひ難している人々のお世話をしていた。家族が目の前で流され、失ってしまった苦しみと悲しみがある中で、誰かのために役に立ちたいと思えるのはすごいと思った。ぼくだったら、家族の中で自分一人が生き残ったら、苦しみと悲しみが大きすぎて、誰かの役に立ちたいとは思えない。きっと亮太さんは、誰かの役に立つことで、亡くなった家族にありがとうという気持ちを返したかったのだと思う。ぼくは、この本を読むまでは、地震や津波で家族や友達が亡くなることはないだろうと思っていた。身の回りでは実際に大きな災害は起こっていないからだ。でも今は、いつ何が起こるか分からないという気持ちだ。この本と出会い、災害で友達や家族を亡くすと、「今日までよく話していたのに。」という受け入れがたい気持ちになることが分かった。

ぼくはこの本を読んで、命の大切さについて、更に深く考えることができた。地震や津波で亡くなってしまった命、人間に捨てられ死んでしまった動物の命、どちらも同じくらい大切だということに気づくことができた。ぼくは、これからもこの気持ちを大切にしていきたい。また、命の大切さについて考えてもらうために、みんなにもこの本を広めていきたいと思う。

（読んだ本／「捨て犬・未来　命のメッセージ」）

小学校高学年の部　優良賞

言葉を伝えることの大切さ

（障害というハンディを乗り越えて）

門川小学校　六年　山野内（やまのうち）　瞬（しゅん）

ぼくは「わたしの心の中」という本を読みました。本の表紙の金魚が金魚鉢から飛び出している絵が描かれており「out of my mind」と書かれています。日本語に訳すると「外へ飛び出す。」という意味です。この本の表紙に脳性まひの子の話と書いており、脳性まひの子がなにかしら外へ飛び出そうとしているのではないかと思い興味を持ちました。

この話はメロディという名前の女の子の話で脳性まひという障害を持って生まれてきました。小さい時から一人でトイレにも行けない、歩くことも出来ない、話すことも出来ず、常に誰かの助けが必要でした。しかし、物事を考える能力や感情はあります。ただそれを言葉を伝えることが出来ないのです。病院で検査をして、結果、医者からもう無理だと見放されてましたが、家族のメロディに対する強い愛情

で普通の学校に通うことが出来ます。そして、自分の考えや気持ちを道具や機械を使って伝える事が出来るようになりますが、学校生活で友達からいじめられたり、距離を置かれたり、つらい経験をします。それを乗り越え、最後はクイズ大会をきっかけに友達との関係が良くなっていく話です。

この本を読んで、メロディは脳性まひという障害によって一人で食事もトイレもお風呂も出来なかったり、自分の考えや気持ちを会話でうまく表現出来ないことにショックを受けました。

メロディは普通の学校に通うことになるのですが、「普通って何なの？」とメロディは疑問に思います。ぼくも「普通」ってどういうこと？と考えさせられました。自分でご飯を食べたり、トイレに行ったり、歩いたりする事が出来るのが普通なのか。そう思うことが差別になるのではないかと思いました。だから脳性まひという障害があるだけで差別やいじめを受ける事は、残念で悲しい事だと思います。メロディの言葉に

「私の周りには何千もの言葉がある。何百万かもしれない。言葉が自分の周りに舞い落ちてくるひらひらひらと。まるで雪のようにどのひとひらも壊れやすく違う形をしていて、手に触れる前に消えてしまいそう。言葉は私の心の深い場所で大きな山となっている。伝えたいことはたくさんあるのに、それは頭の中だけとのこと。

生まれてからたったひとつの言葉すら話したことがない。」

という言葉があります。僕の心は、ぎゅっと締めつくされそうな悲しい気持ちになりました。しかし、表現を手助けしてくれる機器に出会い、また、メロディをサポートしてくれるキャサリンと出会い、メロディが抱える不便さを解消してくれました。ぼくもその時、うれしくなってわくわくしました。また、メロディの力を信じ応援してくれるたくさんの人がいたし、メロディのすべてを受け入れてくれるお父さん、お母さんがいて愛情を受ける事が出来ています。この本は必ず助けてくれるものがあり、信じてくれる人がいることを伝えてくれました。

障害というハンディを乗り越え、前向きにいろんなことに挑戦するメロディのことをすごいと思いました。僕には、ハンディはないが目の前にある嫌なことをこなすのは面倒だし、出来ればやりたくないです。様々な障害を持っている事で不自由さはあるかもしれないが、見た目で判断してはいけない。障害があってもなくても、みんな一緒、仲良し。ぼくも、そういう気持ちで、色々な人と接していきたいです。この本を読んで、表紙の金魚鉢は、メロディの頭の中の思いや考えで、金魚はメロディがみんなに伝えたい言葉だと考えました。

（読んだ本・『わたしの心の中』）

小学校高学年の部　優良賞

幸せってなんだろう

草川小学校　五年　田吹（たぶき）　莉央（りお）

この本を読み終わったとき、「幸せ」について考えさせられました。愛をもらう人と愛を与える人は、はたしてどちらが幸せなのでしょうか。

この本は、木が大好きな男の子の要求を受け入れるために、自分をぎせいにしてまで葉っぱやりんご、木の枝、みきを与え続けるお話です。とくに心に残った場面は、男の子に体の一部を与え続け、最終的には与えるものがなくなったのに、木は幸せだと感じたところです。

この「おおきな木」の原題は、「The Giving Tree」＝「与える木」ということを母に教えてもらいました。私は、自分をぎせいにしてまで、何かを与えることが本当に幸せなのかな、と感じました。

私には、年が三つはなれた弟がいます。おかしをもらったときに、弟が「ほしい」と言ってきたらゆ

ずったり、どんなに時間がなくても、弟がしたくてもできないことは手伝ったりします。しかし、弟のためを思ってしたことでも、私は木みたいに幸せになりません。むしろ、「わたしもおかし食べたっかたな。どうしてあげたんだろう。」と後かいしたり、「時間がないのに手伝ったのだからお礼ぐらい言ってほしいな。」と見返りを求めたりしてしまいます。

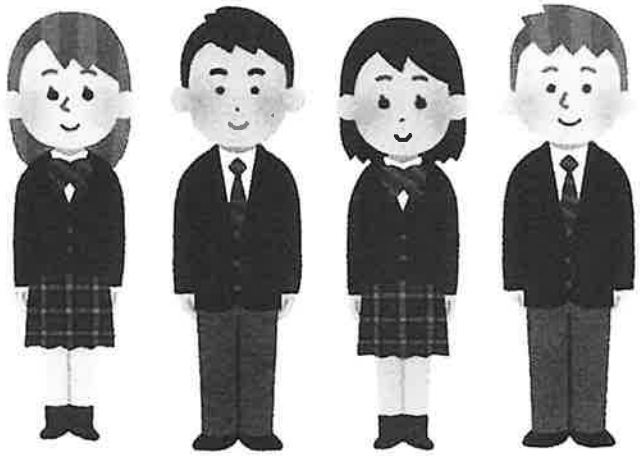
木に色々なものを与えてもらっていた男の子は、してもらって当たり前かのようにお礼も言わなかったのに、木はどうして幸せに感じたのだろうと不思議に思いました。でも、読み進みていくうちにその答えが分かった気がしました。最後の方のページに、切りかぶだけになった木が男の子をすわらせるために「できるだけしゃんと、まっすぐからだをのばしました。」とういう文がありました。そこから、木は自分がだれかの役に立っていると感じたから幸せだと思ったのではないかと考えました。

木の行動や思いにふれ、私自身、友達や家族から愛をもらっていることに気づきました。友達は、こまっていたり、泣いていたりしたときは、すぐによりそってくれます。できないことができるようになったときには、自分のことにようにいっしょによろこんでくれます。心配してくれたり応援してくれたりすることも愛のあかしだと思います。家族は、毎日の出来事を聞いてくれたり、私がしたいと頼んだことをさせてくれたりします。落ちこんだときはアドバイスをくれ、いけないことをしたときはしかってくれます。それは、私のことを大切に思ってくれているからなんだと思えました。なんだか木は母親で、男の子は私に思えてきました。

いつも何かしてもらっている私…与えてもらえることを当たり前だと思わず、自分だけでなく、友達や家族、親せきの人たちも幸せになるように感謝の心をもってすごしていきたいです。だから、私は愛を与えられる人の方が幸せだと思います。

（読んだ本・「おおきな木」）

中学校の部



中学校の部　最優秀賞

いのちを食べる

門川中学校　一年　安田（やすだ）　創（はじめ）

僕がこの本を読もうと思ったのは、母に勧められたからです。この本を読み終えた日、僕の家の夕食はバーベキューでした。バーベキューの材料には牛肉、豚肉、とり肉、エビ、野菜などがありました。

日本の人口は約一億二千万人、そのほとんどが、一日三回、肉やその加工品を食べて生活しています。それが、毎日続きます。その肉はどこからきているのでしょう。この本には、僕たちが知らない、生きている牛や豚が、スーパーマーケットで白いトレーにのって並べられる、その「あいだ」が書かれています。確かに、毎日食卓や給食で食べている肉なのに、それがどうやってできているのかを僕は知りませんでした。

昔から日本では、自然界のすべてには神様が宿っていると考えられていたので、動物の肉を食べるのは「不浄」つまり、汚れているとされていました。肉食が盛んになったのは、戦後からだそうです。

さて、お肉はどこからやってくるのか。筆者は「東京都中央卸売市場」、一般的には「芝浦と場」と呼ばれる場所に取材に行っています。「と場」の「と」とは、「屠」と書き、動物を神様に捧げるため殺して生贄にするという意味があります。芝浦と場は、牛や豚を解体する場所です。全国にと場はありますが、芝浦と場が日本一の規模です。芝浦と場には、平均で一日に牛が三百五十頭、豚が千二百頭運ばれてきます。全国から運ばれてきた牛や豚は、係留所と呼ばれる場所で最後の夜を過ごします。明日には死んでしまいます。僕は、この場面で少し本を読むのをやめたくなりました。かわいそうだと思ったからです。でも最初に書いたように、僕たちはみんな毎日のように肉を食べています。そして、少しでもおいしくてやわらかくなるように、たくさんの子供を産むように、品種改良をしてきたのも人間です。かわいそうでも僕たちが肉を食べるためには、牛や豚を殺さなければいけません。

世の中には、たくさんの仕事があります。例えば、僕の父は農業をしていて、花や野菜を作っています。

祖父は鉄工所で働き、友達のお父さんは建築の仕事をしています。僕たちは父たちのような、農家の方がいるおかげで野菜やお米を食べることができ、友達のお父さんのように、建物を建てる方がいるおかげで、家に住むことができ、畜産を仕事にする方や、生き物を解体する人たちのおかげで肉を食べることが出来ます。

「世界には数えきれない『誰か』がいて、だから、僕たちの生活は続いている。」僕は、この本に書かれているこの一文が一番心に残りました。芝浦と場で働く人々は、食べられるところ、使えるところは徹底して使う。肉の一切れも無駄にしたくないと言って働いています。二千二十年度の調べによると、日本の食品ロス量は五百二十二万トンにもなっているそうです。僕も時々ですが、家の食事を残してしまうことがあります。でもこれからは、「いのちを食べる」ということを思い出して、食事をしたいと思います。

（読んだ本・「いのちの食べかた」）

中学校の部　優秀賞

「この夏のこともどうせ忘れる」読んで

門川中学校　三年　甲斐（かい）　七海（ななみ）

私が本屋に行った時、本棚を見て目に留ったのがこの本でした。

表紙を見てみると、二人の男子生徒がこちらに背を向けて俯き加減に立っていました。題名にもある「夏」と聞くと、明るく元気な季節や、青春という言葉が浮かんできますが、表紙に使われている色や汗ばんでいる二人からはそんな爽やかな夏は感じられなくて、ざらっとしたような重い雰囲気が伝わってきました。私は表紙だけでも随分惹き込まれたので買って読んでみました。

「夏」をテーマにした話が五つありましたが、その中でも私の心に残った「空と窒息」という話を取り上げていこうと思います。

まず印象的だったのは、話が淡々と進み、それと一緒に暗く重い雰囲気がついていくような感じ

がするところです。

登場人物も不気味さがあり現実にもいそうな設定でした。決まって、夏の暑い日に主人公の首を絞める母親、夏休みの夏季合宿で同室になった苦手なグループの相手、主人公に振られたことに納得できていない元カノ。主人公を悩ませるには充分なはずなのに、読んだ時はどこかすっきりして雰囲気を感じていました。でも今思うとその雰囲気は、諦めからくるもののような気します。主人公の母親は、主人公が小さい頃から、夏の暑い日に人が変わったように首を絞めては、その後はいつも通りに振る舞います。どうして父親に助けを求めないのか、どうして主人公は高校生になって母親より体が大きくなった今でも抵抗しないのか気になっていました。同室になった相手に首を絞められていることを知られ、なぜ抵抗しないのか聞かれた時、

「訊いちゃいけないのかと思って。」

「いまさら別のことをして、もっとひどいことになるよりは。」

と主人公は言っていました。私が感じたものが諦からくるものと思ったのはこの部分です。

でも終盤では、同室の相手に知られたことで、あまり話さない人だからこそ打ち明けられて心のわだかまりが少しなくなったように感じました。

最後は、はっきりとしたハッピーエンドというより、これからハッピーエンドに向かいそうな曖昧さを残して終わります。主人公の母親がなぜ首を絞めてくるのかも分からないままですが、私は、母親にも主人公と同じように何か不安なものが心のどこかにあったのかなと思います。

この話をよんで私は、何か不安があった時、それに全力で立ち向かうやり方もあるけど、無理に立ち向かわずにその不安を受け入れるというのもいいのではないかと思いました。不安と上手に付き合っていくのは難しいだろうし、根本的なことは何も解決しないので人によっては納得がいかないだろうけど、不安にたち向かうことが全てではないということが他の読者にも伝わると嬉しいです。

主人公の心持ちが大きく変わった訳ではないのと同じように、私もこの話しを読んで何かが劇的に変わったということはありませんが、ちょっとした大事なことに気付けたような気がします。これからも不安なことはたくさんあるだろうけど、上手く付き合っていきたいです。

（読んだ本・「この夏のこともどうせ忘れる」）

中学校の部　優良賞

ありのままの自分を受け入れる為に

門川中学校　一年　鮎川（あゆかわ）　麻衣（まい）

私は、中学生になってから、新しい事にチャレンジする事が以前と比べて増えました。私も、以前までは、新しい事にチャレンジするのは、とても怖かったですが誰かに自分の実力を認められた時は、とても嬉しい気持ちになると知り今では何事も恐れずチャレンジするようにしています。私が読んだ本にも夏休みの課題として克服したいことに、「ありのままの自分を受け入れること」と、書いた女の子が登場します。私は、「わたしの苦手なあの子」という本を選びました。なぜ、この本を選んだのかというと、題名の魅力に引き込まれたからです。この物語には、小学六年生のミヒロと、ミヒロのクラスに転入してきたリサという女の子二人が主に登場します。父親がいなく母子家庭だけど、母親が再婚しようとしていて、新しい家族が増えるのに心の準備ができていないミヒロ。足のケガのせいで前の学校でいじめられていて不登校になってしまい、その不登校のせいで親が別居してしまったリサ。そんな二人に、夏休み前に課題として、「克服したいことを克服する」と書かれたプリントが配られました。私は、リサが書いた「ありのままの自分を受け入れること」にとても共感しました。リサは、前の学校で足のケガが原因でいじめられていました。転校してからも

足のことをずっと隠していましたが、ミヒロに足のケガを見られてしまいました。リサは、家族のことでなかなか「ありのままの自分を受け入れる」ことができていませんでしたが、ミヒロと話していく内に「ありのままの自分を受け入れること」ができるようになっていきます。例えば、足のケガを気にせず、プールに入ったりすることです。私は、この本を読んで、「ありのままの自分を受け入れること」は、とても大切なことだと思いました。私は、以前まで、ありのままを受け入れることができてなかったと思います。なぜなら、自分を認め受け入りることがなかったからです。例えば、私は、自分に正直になることや自分に自信を持つことがなかなかできていませんでしたが、勇気を振り絞って新しいことにチャレンジすることを頑張るようにしました。私が、中学生になってから一番、チャレンジして良かったなあと思った事は、入学式の誓いの言葉です。私は、最初、小学校の先生に頼まれたとき、断ろうと思っていましたが、こんなチャンス二度とないと思い、誓いの言葉をやろうと思いました。本番は、自分に自信を持ち読み上げることができました。私は、この時に初めて「ありのままの自分を受け入れること」ができたと思いました。入学式の後には、たくさんの方々が、ほめて下さり、頑張ってきて良かったと思いました。前までは、新しいことにチャレンジすることを恐れていた私ですが、自分に自信を持つことなどで「ありのままの自分を受け入れること」ができると知りました。これからは、「ありのままの自分を受け入れる」ことを大切にしながら、たくさんの新しいことにチャレンジしようと思います。

（読んだ本・「わたしの苦手なあの子」）

中学校の部　優良賞

無知であふれる多様性

門川中学校　二年　山内（やまうち）　心陽（こはる）

「人種差別は違法だけど、貧乏な人や恵まれない人は差別しても合法なんて、おかしくないかな。そんなの本当に正しいのかな？」

違法になる差別とならない差別があることを知って私は納得がいかず、腹立たしく思えた。そんな私に、この言葉は冷静に問いかけてくれた。

ティムを「貧乏人」と言ってからかったダニエル。ハンガリー移民であるダニエルに「ファッキン・ハンキー」と言い返したティム。二人とも相手を差別しているのに人種差別をしたティムのほうが厳しい罰を受けた。人種差別は、社会に出たら違法になるからだ。私は、違法になる差別をした人のほうが厳しい罰を受けないといけないのはおかしいと思った。そして、「人種差別だけが違法なんてありえない！」とだんだん腹が立ってきた。どんな差別でもされた人は皆、同じだけ傷つく。それなのに、しても違法にならない差別がある。差別は人を傷つけるから全部違法にすればいいのに、と思った。

そもそも、なぜ差別は起きてしまうのだろう。この本を読み進めていくうちに「多様性」という言葉が見えてきた。多様性は差別ようなトラブルを巻き起こす悪いものだろうか。私は初め、悪いものではないのではないかと思った。一方で、多様性がないほうが平和なのかもしれないという気持ちもあった。中途半端な考え方である。

しかし、この本は中途半端な考えを納得のいく答えに導くいてくれた。私は、「母ちゃんが何回か使っていた「無知」という言葉が気になったので調べてみた。すると、無知には「そのことについて知識がないこと。おろかなこと。知恵がないこと」という意味があることが分かった。簡単にいえば、「知らないこと」という意味だ。知らないのなら知れば良い。そうすれば無知ではなくなる。母ちゃんが「多様性はうんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃん思う。」と言っていた。

多様性があれば無知を減らせる。多様性は自分と

は異なる色がたくさん混ざり合っているイメージだ。自分にはない考え方や感じ方がたくさんあり、それらを知ることで見ている世界は広がる。だから、無知が減るのかなと私は思った。

私の多様性は差別を生むという考えは変わり始めた。差別は知らない。つまり無知だから起こると私は考えたのだ。だから、知れば良いし、自分と異なっていても一方的に否定せず、受け入れれば良い。多様性を認め合って、視野を広くすれば差別はなくなるのではないか。案外、法律で禁止にしなくても一人一人の意識が変われば差別はなくなるのかもしれない。皆が思いやりをもって差別で傷つく人がいない世界を目指したいと思った。いや、私はそういう世界になることを信じている。

最後に、この本の題名は、「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」だが、私の色は、イエローでライトグリーンでいっぱいホワイトにしておこう。ライトグリーンは最後に出てくる「ぼくはイエローでホワイトでちょっとグリーン」を参考にした。グリーンには「未熟」や「経験が足りない」という意味があるそうだ。だから私は、グリーンよりももう少し若いという意味を込めてライトグリーンにした。ホワイトは、これからどんな色にも染められるようにいっぱいにした。

ライトグリーンを完熟させて真っ赤に、ホワイトきれいな色に染められように、広い視野で世界を見て、様々な考えをもてるようにしたい。最終目標は「誰もが多様性を認め合える平和な世界」だ。

（読んだ本・ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー）

読書感想文コンクール　佳作受賞者

小学校低学年の部

門川小学校　二年　水永　あかり
門川小学校　二年　川田　侑里

小学校中学年の部

五十鈴小学校　三年　松本　瑛奈
五十鈴小学校　四年　甲斐　虹翔

小学校高学年の部

門川小学校　六年　宇都宮　誠良
草川小学校　六年　松崎　永

中学校の部

門川中学校　三年　遠藤　結愛
門川中学校　一年　中城　暖良

読書感想文コンクール　審査委員

審査委員長

門川中学校　校長　日髙　健一郎　先生

審査委員

門川小学校　渡邊　もも　先生
草川小学校　古閑　絵里香　先生
五十鈴小学校　中谷　佳代　先生
門川中学校　菅　梨穂　先生
門川中学校　佐藤　綾　先生

あとがき

本年度で第四十一回を数える「門川町読書感想文コンクール」に今年も多くのみなさんが応募してくれました。

作品応募総数は、一一七四点（小学校七百二〇点、中学校四百五四点）で、ここ数年では最高の応募数となりました。読書離れが叫ばれる中において、門川町内の子ども達の読書感想文に対する関心の高さに驚くとともに大変うれしく思いました。

各学校での一次審査を経て出品された作品は五十五点（小学校三三点、中学校二二点）で、いずれも書き手の思いの詰まった力作揃いでした。それら一点一点を二次審査として審査員一同、慎重に読み進めた結果、小学校低・中・高学年の部と中学校の部の四部門から、それぞれ、最優秀賞一点、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点の計二十四作品を選考させていただきました。

読書感想文は「面白かった」「感動した」といったコメントの列挙ではありません。入賞した作品には、感想はもちろん、「自分自身の経験や思い」や「これからの決意」等がふんだんに詰まっており、審査員一同、審査には大変苦労しました。

今回、審査にあたられた先生方の感想をいくつか紹介しますので、今後の参考にしてみてください。

小学校低学年の作品には、「純粋な気持ちがそのまま書かれており、ほっこりする作文がたくさんあった。」中・高学年では「本の内容を自分と重ね合わせ、考えが深いと感じた。」また中学生も「本の内容と自らの体験が上手くつなげられていた。」といったものです。更に小中学校ともに「保護者に紹介された本を読んだ子も多く、親子で本に触れている様子がうかがえた。」といった感想も寄せられました。

「あなたが絶対に知るべき唯一のものとは、図書館の場所である。」と言ったのは誰もが知るアインシュタインです。

門川町では、読書活動の推進を重点の施策として、「門川町の子どもたちに読ませたい図書百冊」の選定など様々な取組を行っています。現在読書離れが大きな社会問題となっておりますが、本町の児童・生徒には是非とも図書館や図書室に通い、様々な本との出会いを通して、心豊かに成長してくれることを心から願っております。

令和五年十月

審査委員長　門川町立門川中学校　校長　日高健一郎